

(構成員へのアンケート調査による)

参加の動機としては、「関心、興味がある、収入になる等」積極的な取組みをした人が5人で残りは「暇がある、なんとなく等」消極的な姿勢だった。

現在の気持ちとしては、「銀線七宝を自分のものとして取得しているという自信を持った。作る楽しみができた。動きにくい手でもまだ作れるという喜びが湧いた等」ほとんどの人が積極的な姿勢を見せている。

今後の希望としては、「材料購入費の保障、作業場の確保、販売ルートの確立、作品展に出品する機会が欲しい等」があがっていた。

#### 〔ま と め〕

1. ほとんどの患者が参加することに意義を見出ししている。
2. 全員に継続の意志がある。
3. 商品価値のある作品が作れる。
4. 将来、売り上げ金で運営できる。
5. バザー等の販売を通じ、地域社会との接触ができる。

以上のことから、今後も継続して作業サークルを発展させて行きたい。

### 33、心理検査から見たカウンセリング における心理的变化 (ケース・レコード)

国立療養所川棚病院

中野俊彦	井上幸平
永田智由子	琴岡静香
谷村富子	

#### 〔研究目的〕

この研究の目的は、カウンセリングを実施して、(1)病気の進行に伴う不安の軽減、及び情緒の安定と、(2)心理検査によるカウンセリング前後の心理的变化の検討であった。

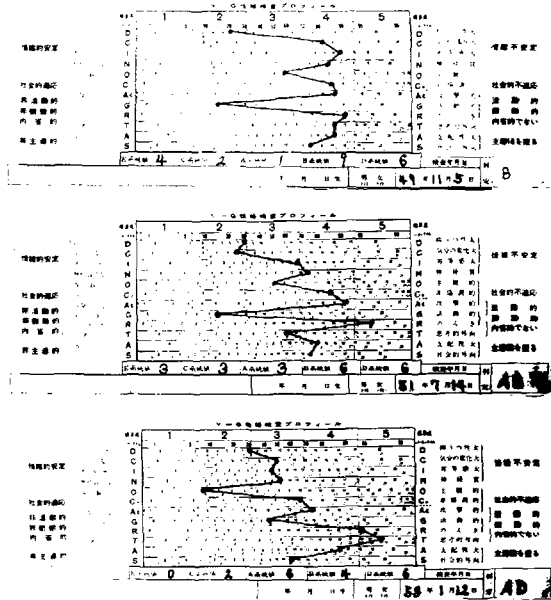
症例1、A男、20才、IQ87、障害段階7度。50年4月より51年12月までに20回の面接、その後数回のフォローアップ、インタビューを続けた。A男のY-Gは(表I)に示す通り、実施前

B型であったが、途中AB型に平化し、現在は53年1月現在AD型で、情緒、社会、適応に改善が見られる。A男のMMPIは、実施前1.3コードであり、カウンセリング終了時7.9コードであったが、53年1月現在1.5で、状態は改善されていると考える。このケースについては、時間が長く、再検査を交互に用いたため、不明瞭な点が多くなった。

症例2、B男、17才、高等部1年在学IQ97、障害段階7度、カウンセリング実施前の本人の主訴は、漠然とした不安、自信欠如、対人不信、生活が面白くない。始終、胃腸の調子が悪いなどであった。

52年3月4日より11月17日まで、15回のカウンセリングを実施した。カウンセリングの方法は、クライアント、センターで行った。表VIに示す通り、回を経るに従って、表情、自己認知、他者への理解に改善が見られた。

A男(20才) Y-G の変化



(表I)

MMPI 冊子式記録用紙 II型

A 男 32 11 3 AD

男



— S51.2.19 1.3 コー D Hs Hy  
 - - - S52.2.17 7.9 コー P<sup>s</sup> Ma  
 (77-X)  
 — S53.1.12 1.5 コー Hs Ms

(表II)

カウンセリングの過程  
B男 17才

52年3月～12月

	感情表出	自己認知	他者の理解	生活への興味
初期 15 6日	感情、抑く 元気がない	自己否定的 悲観的	排他的	自信がなく 不安 将来の不安
中期 7 8日	沈黙	沈黙	沈黙	沈黙
中期 9 5 12日	露骨な 感情表出 (主に怒り)	否定と肯定の 反覆 (知れ性様病状)	攻撃的	何かしてみたい (非現実的な) (面をむ)
後期 13 5 15日	落ち着いて リラックスして 話せる	客観的理解の 芽生え	相手の立場への 理解の芽生え	身近に 目標を定めよう とする努力

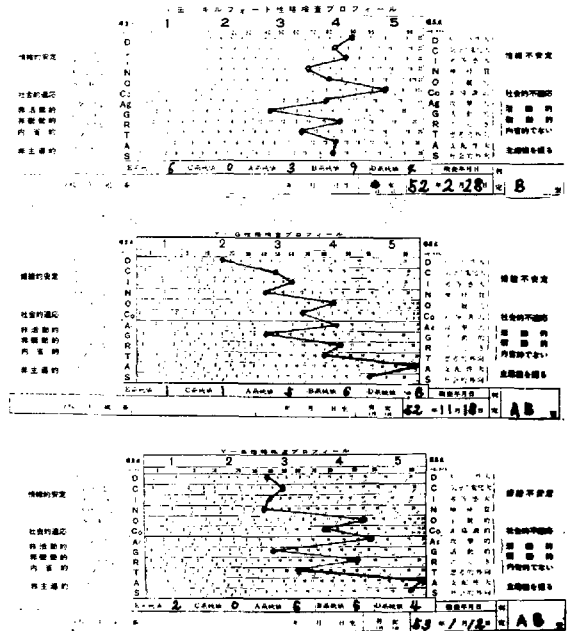
(表Ⅲ)

B男のY-Gの結果は表Ⅳに見る通り、実施前のB型から、実施直後、52年11月18日にはAB型へと変化し、情緒、社会適応の面で改善が見られた。53年1月現在の結果は大差なかった。MMP I (表Ⅴ)の結果は、実施前、pd、pt、4.7コードであった。実施後、53年1月現在の結果は、Hy、Sc型、3.8-6コードで、前回高かったpd、pt、Sc、いずれも55以下に下がっており、状態は改善されていると考える。

〔結 論〕

カウンセリング過程の検討、Y-G MMP Iの結果から、A男、B男共に情緒、心理状態は実施前より改善されていると判断する。従って一応のカウンセリング効果があったと認める。今後の方針としては、情緒不安定消極型、Y-GのE型患児への取組みを進めること、及びグループカウンセリングに取組んでいく。

B男 (17才) Y-Gの変化



(表Ⅳ)



(表V)

----- S52.3.2. 47 コー Pj Pt  
 (478-5)

———— S53.1.13 38 コー Hy Sc  
 (38-6)

### 34. 筋ジス病棟における生活指導に関する研究 — 作業指導における一考察 —

国立療養所八雲病院

指導員 大友 政 明      桜 田    裕  
          藤 島 慎 一  
 保 母 木 村 美 知 子      出 町 友 子  
          遠 藤 美 恵 子

昭和52年4月より、作業室が設置されたのを機会に、第1に病棟間交流を図り仲間意識を高める。第2に自主的活動とし自発性、協調性を養う。第3に七宝焼を行い自己表現力をつける。などを目的とし手芸活動を統一し実施してきたので報告する。

対象、中学卒業者の希望参加としたため、病型、年齢、IQ、障害程度、活動経験の深さなど様々な男子16名、女子5名、計21名であり、主な病型はデュシャンヌ型を中心に、ウェルドニッ

↓  
**検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用  
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります  
↓

〔研究目的〕

この研究の目的は、カウンセリングを実施して、(1)病気の進行に伴う不安の軽減、及び情緒の安定と、(2)心理検査によるカウンセリング前後の心理的变化の検討であった。